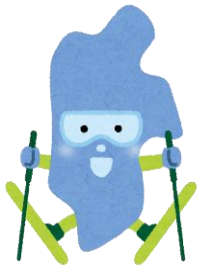


セカンドスクールに向けて その6「オリンピック・レガシーの巻」

1998年2月7日から2月22日まで、20世紀最後の冬季オリンピックとして開催されたのが**長野オリンピック**です。参加国・地域数は72に上り、男子1488人、女子814人、合計2302人の選手たちが7競技68種目でその技を競いました。メインの会場は県庁所在地でもある長野市を中心とした場所でしたが、その他にも軽井沢町や野沢温泉村、山ノ内町、そして白馬村に競技会場がそれぞれ配置され、1972年札幌オリンピック以来の冬季五輪に、地元である長野は大きな熱狂に包まれました。大会をきっ

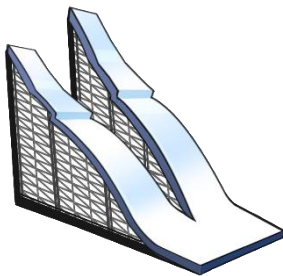


かけにスポーツ施設や道路といった地域のインフラの整備が進み、市民の意識も次第に前向きに変わっていったとのこと。長野市内から白馬村への道も、オリンピック道路としての整備が行われ、短時間で移動できる条件が整いました。その白馬村においては、滑降・スーパー大回転などのアルペンスキー競技会場として**八方尾根スキー場**が、ジャンプとノルディック複合・ジャンプ競技の会場として**白馬ジャンプ競技場**が、クロスカントリースキー、ノルディック複合・クロスカントリーの会場として**スノーハープ**と呼ばれるクロスカントリースキー競技会場が、それぞれ使用されました。

なかでも、白馬村のシンボルでもある白馬ジャンプ競技場では、スキージャンプ競技・団体で日本の選手たちが金メダルを獲得した場所で、今でも多くの人々の記憶に残っています。

1994年ノルウエーで行われたリレハンメル冬季五輪で銀メダルに甘んじた日本ジャンプチームは、雪辱を期して長野五輪に臨んでいました。しかし、1本目のジャンプでエースの選手が失敗、4位に沈んでしまいます。そんな中、2本目のジャンプを前に、猛吹雪のため競技が中断するというアクシデントが発生しました。このまま中止の場合は、1回戦の成績がそのまま適用されるので、日本チームの金メダルの可能性は途絶えてしまうことになります。競技中止か続行か、審判団の協議の結果、25人のテストジャンパー全員がジャンプを成功させることができた場合のみ競技続行という条件で、再開に向けてテストジャンパーたちがジャンプを飛ぶことになります。日本チームの運命は、25人のジャンパーに託されました。日本のメダル獲得を左右する大きなプレッシャーの中、それぞれの思いを胸に、なんと彼ら25名全員がジャンプを成功させます。そして、1本目のジャンプで失敗した選手が土壇場で力を発揮して見事なジャンプをみせ、日本は長野大会で悲願の金メダルを獲得しました。この話は、映画にもなり、現在の日本人ジャンパーにも影響を与えています。

そんなドラマを生み出した白馬ジャンプ競技場は、日本で唯一、ノーマルヒルとラージヒル用のジャンプ台が2つ並んだ特徴的な姿の競技場です。正式名称はラージヒルが**長野県白馬ジャンプ競技場**、ノーマルヒルが**白馬村ジャンプ競技場**となっており、県営競技場と村営競技場が共存している恰好です。季節を問わずスキージャンプが可能で、セカンドスクールの時にも練習風景が見られるかもしれません。また、ジャンプ台の下では五輪の期間中に聖火を灯し続けた聖火台や、夏季・冬季五輪通算100個目の金メダル記念モニュメントを見ることができます。



中心となるジャンプ台はというと、ラージヒルは全長が385m、標高差は138m、斜度はなんと37.5度（！）です。ノーマルヒルでも、全長が318m、標高差は107m、斜度は36.5度に達するというもので、上から見るとなかなかの迫力です。一般の人でもリフトを使ってスタート地点まで行くことができるので、選手が滑り出す高さを体験することができます。また、スタートタワーの中2階には、オリンピックギャラリーがあり、1998年長野オリンピック・パラリンピック冬季大会の貴重な資料や写真等を見学することができます。